

ら、この付近は、会津盆地のすべての水を集水するので、地氾りが起きて塞がなくても、峡谷そのものが、山崎新湖滞水のような様相を呈し易かったのであろう。

## 六、明治以後の主な洪水

明治二十一年（一八八八）七月十五日の磐梯山噴火は、会津地方にとっては有史以来の大異変であったが、会津盆地の中央部にはあまり影響がなかった。

明治三十五年（一九〇二）九月二十八日の大洪水は、明治以後最大のものであったらしく、死者一〇二人を出したと記されている。

明治四十四、五年（一九一一、二）とひきつづいて大洪水があったが、主に盆地北半に被害が大で、田付川、耶麻濁川の増水は九尺余とある。

大正元年、二年（一九一二、三）と引きつづき大洪水があったが、大正二年には洪水量の基礎となる降水量がきわめて多く、洪水も最高水位の記録がとられて、大正八年（一九一九）よりの改修十五カ年計画の基礎資料となっている。下流の日橋川・阿賀野川の洪水調節については、既に猪苗代湖の戸の口用水の通水が、明治十四年（一八八一）七月二十五日より行なわれ、ひきつづき明治四十五年（一九一二）の日橋川発電所建設以来第一、第二と発電所が建設されて、十六橋による湖面調節が行なわれて、相当の効果を發揮していた。

会津盆地の洪水は、古くから東風が強く吹けば大川が氾濫し、西風の時は宮川が洪水になるといわれている。これは大川の水源が奥会津の田島地方にあり、宮川の東壁は博士・明神などの連嶺に限られ、その西斜面は只見川に注ぐ、地形的影響による増水差であると思われるが、大正二年の降水量は宮川流域にいくらか少ないかにみ